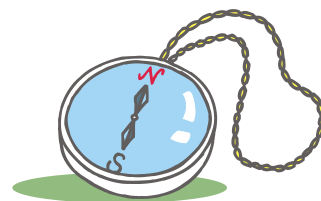


羅 針 盤

第 13 号

令和2年（2020年）7月27日（月）



◆ 勝利の女神は些事（さじ）にあり

7月24日にアメリカの大リーグも開幕された。ヤンキースタジアムで行われたキャンプでの投球練習中に打球が頭部を直撃してしまうという災難にあってしまった、ニューヨーク・ヤンキースの田中将大投手も順調に回復して試合出場に向けた練習を行っている。紅白戦では良い結果が出てきている、ロサンゼルス・エンゼルスの大谷翔平選手も、大きな期待を受けながらも活躍が望まれているところである。「勝利の女神に些事（さじ）あり」、この言葉は2011年の夏の甲子園に出場した花巻東高等学校硬式野球部が掲げたスローガンであり、大リーグで活躍している大谷翔平選手の座右の銘でもある。それは、「ささいなことでも全力を尽くす」という意味で、「小さなことの積み重ねが大きな結果（勝利）につながる」ということだそうです。大谷翔平選手は、日常生活での「毎日あいさつをする」、「時間を守る」、「身の回りを整理整頓する」等の当たり前のことを当たり前に行うことを何よりも大事なことで考えていて、普段から些事（さじ）にこだわりを持ち、妥協することを決して許しはしないという気持ちで、試合にも臨んでいるそうです。逆にいうならば、普段のいい加減さが勝負を分ける場面でこそ露呈すると、自分自身に常に言い聞かせているそうです。元大リーガーであるイチロー選手も「小さなこと」を決しておろそかにはしない選手でした。ベンチを一步出たときから、バッターボックスに向かうまで、毎打席同じルーティンを踏んでいます。また、ホームランを打った時は、急ぐ必要がないので、自分のバットを静かに地面に置いてから走り出していたそうです。自分の使っている道具についても大切にするというこだわりが見てとれる場面だと思います。このようなことは、私たちの生活の中でも見られることではないでしょうか。「ちょっとぐらかまわない」といった気持ちの甘えを許さないで、当たり前のことを当たり前にきちんとできる人に、しっかりと成長していったほしいと思います。



◆ 直木賞受賞作品より

7月15日に、第163回直木賞の受賞作が発表されました。受賞作は『少年と犬』で、著者は1996年のデビュー作『不夜城』がベストセラーとなった馳星周（はせせいしゅう）さんである。初めて直木賞候補となってから、じつに7度目のノミネートでの受賞となった。デビュー当時とは少し作風も変わり、40代半ばになってから「書きたいものを書こう」と考えを改めたそうで、その頃に東日本大震災が起き「忘れちゃいけない災害を書くことは使命」と思うようになったそうです。著者自身が、東日本大震災の後、何か月も経ってから被災地を訪れたときに、その惨状に言葉を失うほどの経験をされていて、熊本地震のときにも、たまたま取材で四国にいたときで、アラートがものすごい勢いで鳴り響いたそうです。自然災害が日常となり、人間はこれからどう生きるべきなのかを考えながら小説を書いていくと述べられています。受賞作の『少年と犬』は、宮城から熊本へと旅する1匹の犬と、傷つき悩む沢ありの人々との魂の触れ合いを描いた作品となっています。機会があれば、是非一度読んでみてはどうでしょう。

